

シンポジウム：話題提供者1

顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援：総論

稻垣 真澄

（国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター（NCNP））

改正発達障害者支援法（平成28年法律第64号）で発達障害は、広汎性発達障害（自閉スペクトラム症（ASD））、限局性学習症（LD）、注意欠如・多動症（ADHD）およびその他これに類する脳機能の障害であると明文化されている。ASDとADHDは社会性や多動・衝動性の症状が家族や周囲の者に気づかれることや乳幼児健診等がきっかけとなり、早期評価や診断および介入・支援の方針が立てられている。一方、チック症、吃音症、不器用などの発達障害は各自単独、あるいはASDやADHDと併存し発症するが、その特性を幼児期において精確に抽出する評価手法は明確でなかった。

私たちは厚生労働科学研究費を得て上記の「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」班を2016年4月にスタートした。研究は①気づかれにくい発達障害の特性を明らかにすること、②スクリーニングするアセスメント手法を確立すること、そして③現場での導入を考えて統合された評価シートを作成し、その妥当性、信頼性を検討することを目的とした。二年間の研究の結果、わが国の全11地方（内閣府地区分類）のサンプルエリアから、就学前児童（5～6歳）合計3542名（55機関）のデータを得た。本サンプル数は十分なサンプルサイズであり、本邦の年長児の代表値と見なせると考えた。

完成したアセスメントツールである「観察シート（CLASP）」はA4サイズの一枚紙で、19項目（話し方の4項目、くせの5項目、読み書きの5項目そして運動の5項目）から構成される。統計学的に信頼性が高く、構造的妥当性も検証されている。観察シートによるリスク有無判別と実際の医師による診断の一一致率は85.0～97.1%、そして特異度は85.2～97.1%であり、極めて高い判別精度を示していた。保育士・幼稚園教諭への追加調査により本観察シートは平均4.5分で記入できるという簡便さも確認できている。現在私たちは、厚生労働省の障害者総合福祉推進事業に携わり、発達障害（読み書き障害、チック、吃音、不器用）の特性に気づくチェックリスト活用マニュアルの作成に関する調査も行っている。具体的には、チェック項目が多いケースで果たして本当に発達障害とみなせるか否かの検証過程等である。私たちは完成したマニュアルとともに観察シートが日本全国の子どもたちのために役立つことを願っている。

以下の話題提供では、本調査研究班のメンバーによる具体的な研究成果を元に各々の発達障害の特徴、チェックリストの項目の説明、そして就学前から就学後にかけての具体的な支援策について、聴衆の皆様の「あしたからの実践に役立つヒント」をご紹介したいと考えている。